

< SSR 調査研究部門 >

1. 調査研究のテーマ

ユーザー指向ユビキタスインタフェースに関する調査研究

2. そのテーマの戦略的意義 / 位置付け

ユビキタスコンピューティングや Pervasive Computing は最近、わが国でも注目され始め、すでに研究も始まっている。その技術的基盤が整い始め、また、特にわが国において家電の研究開発が盛んであったことも加えて、一層、関心を集めているものと思われる。

しかしながら、現在わが国で行なわれているユビキタスコンピューティング研究のほとんどは技術指向であって、特定のシーズ(たとえば、IPV6 や無線タグなど)をどのように使うか、という観点でしか見てないものが少なくない。

これは一般に研究の初期段階ではやむを得ないこともあるが、ある程度の研究の背景が整った段階では、むしろ発想を 180 度変えて、ユーザーの立場で、ニーズとしてのユビキタスを開発していく必要があると考える。ここでは、初期のインターネットの研究も結局は、Web というキラーアプリケーションの登場によって一挙に開花し、広まったという事実を思い出すだけで良い。

ユビキタスコンピューティングは、提唱され初めてから既に 10 年以上経過しており、ここでは、むしろユーザー視点でヒューマンインタフェースの立場から改めて、ユビキタスの可能性と問題点を調査研究することを提案する。

3. 調査研究の概要

本調査は、ユビキタスコンピューティングをユーザーの立場に立った、ヒューマンインタフェースとして捉え、以下の項目に関して調査研究を行なう。

- (1) ユビキタスコンピューティングの具体的実現例(応用中心)
- (2) 高齢者・障害者を含め、ユニバーサルデザイン的な視点を含めた生活者のためのユビキタスの利用
- (3) ユビキタスにおけるアンビエントインタフェースの有効性
- (4) ユビキタス環境における「プライバシー」概念の検討とその保護のための環境整備・技術的問題
- (5) ユビキタスによって変るライフスタイル
- (6) 現状におけるユビキタスコンピューティングの技術的課題

本調査におけるこれら6つの領域は、研究チームによって調査する予定であり、国内、海外の研究所、学会等での実施例を調査分析すると同時に、参加メンバーと外部から招待された人たちを含むメンバーにより、ブレイクアウトも行なう。具体的な調査対象として、UbiComp や Pervasive Computing などの国際学会だけでなく、たとえば、ジョージア工科大学の Aware Home などの実践例も候補である。ユビキタスコンピューティングに関心のある企業に対して、戦略的な方向付けを示唆してゆく。

SSR フォーラムの活動方針に従い、我々は、今年度末までにレポートを作成し、調査結果はすべて Web 上に保存する。

4. 調査研究の進め方(共同研究者など)

調査グループ構成メンバーは、次の通りとする。

主査	安村 通晃	慶應義塾大学 環境情報学部
メンバー	椎尾 一郎	玉川大学 工学部
	田中 二郎	筑波大学 電子・情報工学系
	黒須 正明	メディア教育開発センター
	原田 悦子	法政大学 社会学部
	中西 泰人	電気通信大学 情報システム学研究科